

光。逆起は一場所での返り咲き、磯雷光は場所の悔しさを晴らして嬉しい新十両となる。東八枚目の元十両磯若が5戦全敗で幕下から陥落。だが関取経験者は育成会では取ることが出来ない規定により、廃業となる見込みだ。(勝間田)

三段目、序の口

三段目は全勝で強久根と石神が対戦し、住之江部屋の石神が寄り切って優勝。これで石神は優勝候補の伊勢の里に続き春日根勢を連破。春日根キラーの誕生かと場内を沸かせた。住之江親方としては期待の把若寿が負け越しただけに悲喜半ばといったところか。

序二段では錦風部屋の逆本が大松戸部屋期待の播場を容赦なく下して先場所の序の口全勝優勝に続き10連勝と未だ土つかず。錦風親方は、兄の逆元春は駄目だがこいつは期待できるとにんま

序の口は全勝の諏訪が西破敗れて157回場所以来の1敗祭り。5力士によるトーナメントの結果、決勝は諏訪と西破が再戦。今度は諏訪が雪辱を果たし優勝。「それなら最初から本割で勝っておけよ」と運営サイドからの文句がポロリ。

序二段、序の口とも大松戸、加古川の両部屋が元氣。播場、大鳴門、手柄山、志方山全員が4勝を挙げ、気炎を吐いた。(鹿)



諏訪○(押し倒し)●西破



播場●(寄り切り)○逆本



石神○(寄り切り)●強久根

加古川親方本場所観戦記



12月14日早朝、姫路駅に到着。待つこと15分。東京行の新幹線「のぞみ」に乗り込んだ。そう。待ちに待った日本紙相撲協会本場所初観戦の日がやってきたのだ。

昨晩は、なかなか寝付けなかった。ヨメからは「遠足に行く前の小学生みたいやな」と笑われたが、まさにそのとおり。なにしろ積年の夢が叶うのだから、興奮しないわけがないのだ。

日本紙相撲協会の存在を知ったのは高校三年生のとき。たまたま本屋で見つけた「負けな！紙相撲」がきっかけだった。本は数え切れないくらい繰り返し読んだ。そして、はるか遠い「トーキョー」という国に、紙相撲の総本山があって、そこで紙相撲の神様とその仲間たちの手で本場所が行われているのだ。そう思いを馳せてきた。

あれから三十有余年が過ぎ、今や五十を過ぎてすっかりオジサンになった自分が、日本紙相撲協会の本場所を初観戦するのだと思うと、まるで聖地巡礼するアニメファンのようにゾクゾクするのだった。

東京駅で丸ノ内線、池袋で西武線に乗り換えて、練馬高野駅に到着。十五分ほど歩いて朝日松理事長宅に到着した。練馬国技館には7月にも訪れていたの初見ではなかったが、間近で見るとやはりその威容は圧倒的だ。ウチの折られたみ式の「加古川紙相撲会館」とはえらい違いだ。いつかウチも常設の国技館を作りたい。

その後、前泊していた住之江親方との再会をよるこび、風呂から出てきた理事長とご挨拶。すると、錦風親方がやってきた。あ！あの！熱中時間に出ていたあの人だ！

まるで皇族に拝謁した庶民のように丁寧にご挨拶して、ありがたお話を伺っているうちに、霧ヶ浜親方、鹿賀乃戸親方、勝間田親方、香具山親方など、親方衆がぞくぞくと集まってきた。私のヴォルテージュは一気に高まった。

「それでは始めましょうか」のひと声で本場所が始まる。ここからはYouTubeで繰り返し見た光景が延々と続いた。

育成会では「呼び出し」をさせて頂いたが、何しろ今まで紙相撲で遊ぶのはずっとひとりだった。自分の声が親方衆に聞かれているのかと思うとひどく緊張して、私のノミの心臓はバクバクするのだった。

そうこうしているうちに、春日根親方、磯ノ海親方、桐壺親方も合流。紙相撲はやっぱ自分の部屋の力士が登場すると気合が入るし、勝つと思わずガッツポーズが出る。幸いなことに加古川部屋の二人はともに勝って、はるばる辺境の地からやってきた私を喜ばせてくれた。

十両、幕内には私の力士はいないので、幾分冷静になって取組をじっくり観戦。霧ヶ浜親方の美戦、叩き手である勝間田親方の職人技、錦風親方と鹿賀乃戸親方の微笑ましいやりとり、そして勝つた負けたで大騒ぎする親方衆を間近に眺めながら「やっぱり仲間と一緒にやる紙相撲はホントに楽しいな。自分もその仲間のひとりになったんだなあ」としみじみ感じるのだった。



練馬国技館砂被りで観戦している二次元の私(左手前二人目)

土俵の方は優勝決定戦の末、大関西神門が逆転優勝して幕を閉じた。千代鈴は第一人者の貴祿を十分示したし、若ノ嶋は優勝こそ逃したものの復活を強く印象付けた。春ノ翔は若ノ嶋、西神門に勝って健在をアピールした。

関西勢では住之江部屋の櫻吹雪が勝ち越しを決め、大松戸部屋も幕下の出雲山が勝ち越して、育成会の播場、大鳴門と楽しみな逸材が出てきた。私のところの手柄山、志方山はとがんに四勝一敗の好成績をおさめた。

表彰式のあと、場所所を移して懇親会&忘年会が行われた。初参加の私にとっては本場所観戦同様には有意義な時間。紙相撲をはじめめたきっかけや苦労話、失敗談、テレビ撮影の裏話、そして今抱えている紙相撲界の課題など、どれもこれも興味あつという間に時間が過ぎていった。



千秋楽打上げで紙相撲談議、最高！

その後、朝日松理事長のお宅で日本紙相撲協会の貴重な史料を多数拝見させて頂いた。特に興味深かったのは、徳川さん直筆の星取表や手記、そしてナマで見ると富士昇、荒登、田子ノ浦、照の花、三津知。私が生まれるよりはるか前に初土俵を踏んだ往年の大横綱たち。その浅黒く変色した顔が歴史の重みを伝えてくれる。

やはり七十年というのは伊達じゃないのだ。この歴史を決して途絶えさせてはいけない。徳川式紙相撲の素晴らしさを広く伝えて、子々孫々まで残していかなければならないのだ。それがたとえ微力であっても自分に与えられた使命のように感じながら、私は加古川への帰途についたのだった。

最後に、初対面にも関わらず、気さくに声をかけてくださった親方のみなさん、そして何から何までお世話になった朝日松理事長、本当にありがとうございます。お預かりした新弟子は、加古川で花開くよう大切に育てます！それでは、来年もよろしくお祈りします。(加古川)

人事往来

【定年退職】
友引(元桜豊王)
宵待(元那須野)



※江戸川親方(元剛勇山)も定年となるが、ただ一人の後継者、二代目剛勇山がまだ現役のため当面部屋の運営を継続すること。